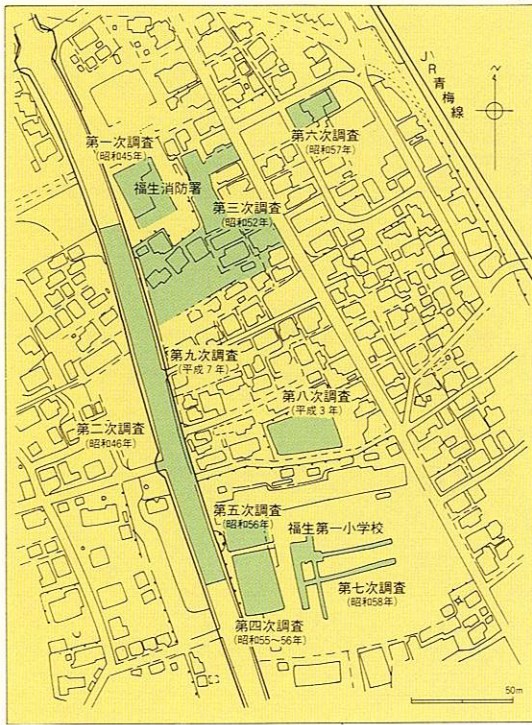


4 長沢遺跡の集落

■縄文人の生活の跡

福生市内には、現在一九か所の遺跡が確認されている。なかでも拝島段丘の縁にある長沢遺跡は、市内最大の縄文遺跡で、福生駅の北西約三〇〇メートルの地点を中心とし、約五万平方メートルの面積をもつと推定されている。段丘の崖には、かつて豊かな湧き水があったと考えられることから、この地域は、縄文時代の人びとにとって住みやすい環境であったといえよう。



長沢遺跡調査区域全図(年号は調査年度を示す) 長沢遺跡は、今から約4000年前を中心とした縄文時代中期の環状集落と推定されている。

ここでは、一九七〇年(昭和四十五)の第一回に始まり、現在までに九回の発掘調査が行われてきた。これらの調査によって、竪穴式住居跡のほかに、温めた石を敷きつめ、蒸し焼き料理に使ったと思われる穴(集石土坑)や、墓と思われる穴(土壇墓)など、多くの遺構がみつかった。また勝坂式土器や加曾利E式土器、土掘り用の道具である打製石斧といった石器類など、多種多様の遺物が出土している。



福生市の遺跡分布図

番号	遺跡の概要	時代	主な出土遺物
1	台地 包蔵地 羽村9に接続	縄前中後	縄文土器 打斧 礮器 土師器
2	台地 単独出土地	縄中	石楯
3	台地 集落 280×200 m 縄敷石住居?	縄後Ⅱ?	縄文土器 石楯 土師器
4	台地 集落 350×250 m 縄住居 土坑 配石 石敷石遺構	縄前中後Ⅱ	縄文土器 打斧 石楯 石楯 石匙 石皿 凹石 土製円盤 土甕
5	台地 包蔵地 270×150 m 縄敷石土坑	縄早中後	縄文土器 打斧 礮器 石楯 石皿 磨石 スタンプ形石器
6	台地 包蔵地 150×100 m	縄後Ⅱ	縄文土器 石楯 土師器
7	台地 包蔵地 250×100 m	縄中Ⅱ	縄文土器 剥片 土師器
8	台地 包蔵地	縄	石楯
9	台地 包蔵地	縄	石楯
10	台地 包蔵地	縄	石楯
11	台地 包蔵地 340×100 m 縄敷石土坑?	縄早中Ⅱ	縄文土器 石楯 土師器
12	台地 包蔵地 170×120 m	縄後	打斧
13	台地 包蔵地 100×60 m	縄前中Ⅱ	縄文土器 打斧 剥片 土師器
14	台地 包蔵地	縄Ⅱ	剥片 土師器
15	台地 包蔵地	Ⅱ	土師器
16	台地 包蔵地	縄中Ⅱ	縄文土器 土師器
17	台地 包蔵地	縄	石楯
18	台地 包蔵地 Ⅱ溝状遺構	Ⅱ	板碑
19	台地 単独出土地 Ⅱ銭貨	Ⅱ	中国銭貨

縄文時代 Ⅱ古墳時代 Ⅲ平安時代 Ⅳ中世 Ⅴ不明確

福生市の遺跡包蔵地詳細表

■集落遺跡の概要

この遺跡はいまから約五〇〇〇〜四〇〇〇年前の縄文中期の集落遺跡で、土器の形式でいうと、勝坂式期（中期前半）、加曾利E式期（中期後半）にあたる。遺跡の南寄りに勝坂式期、北寄りに加曾利E式期の住居の跡が集まっている。長い年月にわたり集落が営まれたなかで、居住区域が移動していったのであろう。

また遺跡の中央部付近には遺物が少なく、広場のような場所があつ



長沢遺跡 9次調査(福生消防署南側) 9次調査では13軒の竪穴式住居跡が確認された。



長沢遺跡 7次調査(福生第1小学校校庭) 校庭で竪穴式住居跡が1軒確認された。

■集落の発展と衰退

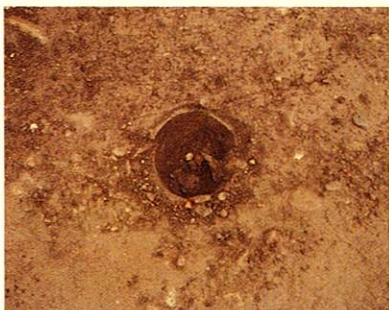
ここで暮らした人びとの生活の跡は、縄文前期から後期にわたって確認することができる。しかしながら、縄文前期の明確な遺構はみつかっておらず、また遺物の出土も少ないことから、はじめて長沢の地をおとすれた人びとは、定住したのではなく、一時的な狩猟活動などの跡をここに残したものと考えられる。

人びとがこの地に定住し、集落を形づくったのは縄文中期初頭のことであろう。住居跡はみつかつてはいないが、炉の跡が発見されたことから、このころから定住生活が始まり、集落がつくられていったと考えられる。その後、人口がふえたためか、集落の規模が急に大きくなっていった。また住居の建替えの跡がみられ



深鉢形土器(阿玉台式・2次調査出土) 阿玉台式土器は関東地方の東部を中心に分布する土器である。この地域の特産物を入れて、交易によって長沢遺跡にもたらされたものであろう。

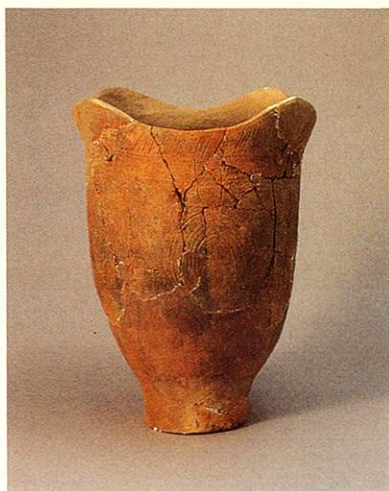
たことが確認された。集落の中央に広場や墓地(墓域)があるものを環状集落という。長沢遺跡でも、十数基の土壙墓が中央部付近で確認されている。時が経つにつれ、居住区域が移動しても、これらの墓域は移ることなく、決められた一定の場所にあった。人びとはここを集落内での聖域としていたのであろう。



埋甕炉(7次調査出土) 埋甕炉とは土器を地中に埋め、その中で火を焚いた炉である。



竪穴式住居跡(7次調査出土) この住居は地面を掘ってつくられており、四本の柱の穴の跡がある。



深鉢形土器(五領ヶ台式・3次調査出土) この土器は3次調査で確認された炉穴から出土した縄文時代中期初頭の土器で、この地域に本格的な集落がつくられる前の段階のものである。

は貝塚がつけられ、漁撈活動が活発になったのに対して、なぜ内陸部である多摩川中流域において、縄文社会が崩壊していったのか明らかではない。あるいは、環境の変化による寒冷化が、採集経済に大きな打撃を与えたのであろうか。

るところから、この場所に長いあいだにわたって生活が営まれていたと考えられている。

縄文中期末になると集落の規模は急に小さくなっていく。これは長沢遺跡だけでなく、この時期の多摩川中流域にある遺跡に共通してみられる現象である。環境の変化などによって、この地域の人口は減少したのであろう。やがて後期に入ると生活の跡はなくなり、この地に住む人びとは姿を消していった。

福生市内では、このあとの短い期間に、小さな集落が営まれているが(6号遺跡)、これが縄文時代の人びとの最後の生活の跡となっている。そしてこれにつづく時代の遺跡はみつかっておらず、以後、中世に至るまでこの地域に人びとの生活の様子をたずねることはできない。これと同じ時期の関東地方の海岸地域で